

移行期の指導について

田中 宏明

Instruction in Musical Education during the Transitory Stage from Kindergarten to Elementary School

Hiroaki TANAKA

Abstract

Kindergarten curricula are designed to encourage children to naturally learn music through everyday activities centered on playing as prescribed for the field of expression in Japan's Educational Guidelines for Kindergartens. In the revised 2008 Educational Guidelines for Elementary Schools, the phase "basic ability in musical activity" was added. The term "expression," which appears at the beginning of the objectives in the Educational Guidelines for Elementary Schools, is not an ability considered to be picked up from everyday life or comprehensively as it is in kindergarten. Kindergarten students learn music by mimicking during play. When they start at elementary school, they engage in advanced musical learning with more specific objectives designed to develop their ability to play musical instruments based on listening and imitating. Students then learn how to read music. First-grade music textbooks are unique introductory study materials that support learning in the basics of music reading.

1. はじめに

幼稚園教育における音楽は言葉や遊びなどの「表現」の一部として存在する。いっぽう小学校教育では音楽は一つの「教科」として独立している。幼稚園教育要領における表現活動について小野 (2003) は、「子供の自発性に基づく表現が重視されている」^[1]と述べている。これに対して小学校学習指導要領の「音楽」では「音楽文化の伝達と音楽表現力の育成を目標としている。」^[2] (小野 2003)、とある。また、幼稚園と小学校における音楽教育の関連性について関間 (1982) は、「小学校低学年の児童は、音楽に対する興味・関心が高く、幼児期からの継続で、〈遊び〉と結び付いた経験を通して音楽的にも著しい成長を遂げる。」^[3]と述べている。

保育活動の中の、感性と表現としての一領域である広義の音楽から、教科としての音楽へと、教育内容や音楽的な指導がどのように移行してゆくのかを、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領、および小学 1 年音楽科の教科書を手掛かりにし、考察する。

所属:

藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University

2. 幼稚園教育要領から読み取れる音楽教育の特徴

幼稚園では遊びを中心とした生活を通して音楽が自然に身につくようにカリキュラムが組まれている。平成20年に改訂された、幼稚園教育要領の「第2章 ねらい及び内容」^[4]によると、次の5つの領域が示されている。

- ①心身の健康に関する領域「健康」
- ②人とのかかわりに関する領域「人間関係」
- ③身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
- ④言葉の獲得に関する領域「言葉」
- ⑤感性と表現に関する領域「表現」

これらの中で音楽は「表現」領域の“一部”として関わりを持つ。上記教育要領における「ねらい」¹⁾は、教育内容が何らかの分野に特化したものではない。つまり総合的な教育の一部として音楽が扱われているのである。

次に領域「表現」に記載されている「内容」²⁾から音や音楽に関するキーワードを探る。内容(1)～(8)のうち、次の3項目にキーワードが含まれている^[5]。

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

例えば、園児同士で（人間関係）園庭を散歩し、様々な花を観察（環境）した後、教室に戻って観察した花の名前から関連した花、桜やチューリップなどを絵に描いたり、折り紙で折る。この際、色に関する発想を引き出したり、出来上がった花を協力して台紙に貼り、花の名前の歌を歌う。これらの行動は音楽の領域の他、数多くの要素が複合的に合わさっている。園児たちはこういった日々の保育行動の中で、「音楽」というものを特に強く意識することなく、感性を育んでゆく。

このように幼稚園教育要領の「ねらい及び内容」では、教師主導の一方的な保育の展開ではなく、幼児が主体性を発揮して活動を展開していくことに主眼を置き、カリキュラムを組んでいることがわかる。ちなみに上記の3項目の中では、(6)が小学校の音楽教育との関連性が最もみられる項目である。

3. 小学校学習指導要領から読み取れる音楽教育の特徴

いっぽう小学校では幼稚園とは異なり、指導案等に細かく明記された各教科の内容を、教科書などの教材を用いて学習している。平成20年改訂「小学校学習指導要領 第2章 第6節 音楽」^[6]では以下の第1～第3のように目標と内容が述べられている。

第1 「目標 表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」^[7]

本改訂では「音楽活動の基礎的な能力」という文言が新たに加えられた。また目標の冒頭にあり、幼稚園教育要領にも使用されている「表現」という言葉は、幼稚園でのような「生活の中で」や「総合的」といった大きなくくりではない。

第2 「各学年の目標及び内容」^[8]にある「内容」（第1学年及び第2学年）は、A表現、B鑑賞の2項目からなっている。このうちA表現の項目(2)「器楽の活動を通して、次の事項を指導する。」^[9]には、「範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。」^[10]とある。

幼稚園教育との関連性を考えてみると、幼稚園での演奏に特化されていない「遊びの中でのまねっこ」

が、小学校に入ると「範奏」を聞いて模倣し演奏するという、より目的をはっきりと持った学習へと移行する。しかし、小学校入学間もないころの児童のほとんどは自発的な読譜が完全ではない。そのため、この段階の指導では、「範奏」を模倣し演奏することで、歌唱や器楽演奏の指導が可能となる。そしてこの時期に、模倣と並行して読譜の指導を進めることにより、「音楽活動の礎」を形成してゆくのである。

第3 「指導計画の作成と内容の取扱い」^[11]の項目の(4)では、「低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること。」^[12]とある。

ここで再び幼稚園教育との関連を探ってみると、幼稚園の教育では、教師や友達との感動経験の共有、受容と共感を繰り返し体験することにより、意欲的な表現活動を促すよう環境を整えてゆくことに重点を置いている。

いっぽう小学校での指導では、情緒や身体の発達によって、幼児期とは興味や関心の方向性が異なってくる。より独立心が芽生えたこの時期の児童が持つ資質や能力を教育者ができるかぎり把握し、個々の興味の指向を考慮した題材を用い、適切な時期を考慮しながら指導することとなる。適切な時期の具体的な内容については、歌唱の表現活動において生活科などに関連して、季節や学校の行事と結び付けることで、より身近で広がりのある表現活動が可能となり、その延長線上で音楽を特徴付けている要素や仕組みなどを理解させることができると考える。

4. 幼稚園から小学校における音楽教育の展望

幼稚園では園児の年齢が進むにつれて、文字の読み方を教師や友達に聞いたり、文字を真似して書いたりする姿が多く見られるようになる。これは、園児自身が友達と手紙を交換したい、興味を持った本が自分で読めるようになりたいといった自発的な動機や欲求に促された結果であり、保育者側は決して教え込んではいない。一方、小学校では独立した「教科」としての音楽教育になってゆくため、表現のための道具としての「読譜能力」を身に付けさせる必要がある。中村(2000)は、「楽譜の読み書き能力は何よりも学校教育によって身につけられるべきであり、私的な音楽教育にゆだねられるべきではない。」^[13]と述べている。これは小学校学習指導要領の「目標」として掲げられている「音楽活動の基礎的な能力を培い」という項目につながっていると筆者は考える。日本人の識字率はほぼ100%に近い。しかし、音楽での「文字」に相当する楽譜を読む力「読譜能力」については、一部の音楽教室などで専門教育を受けたもの以外はあまり高いとは言い難い。

現在、この基礎的な読譜能力の導入を目標とした項目を盛り込んだ教材が、小学校1年の教科書に採用されている。ここでは学習指導要領に掲げられた第1学年で履修する4曲の共通教材³⁾から、「日のまる」の楽譜を例に挙げ、二種類の教科書から読み取れる読譜指導の特徴を比較する。

譜例1 ひのまる 「あたらしいおんがく 1」 東京書籍^[14]

ひのまる

♪=104 6/8
 文部省唱歌 高野辰之作詞 高野貞一作曲

●	●	●	●	●	●	●	●
1	し	ろ	じ	に	あ	か	く
2	あ	お	ぞ	ら	た	か	く

●	●	●	●	●	●	●	●
ひ	の	ま	る	そ	め	て	て
ひ	の	ま	る	あ	げ	て	て

● どれみや「たんたん」で うたったり、
 ◎ や ○ で ばんそうしたり しましょう。

●	●	●	●	●	●	●	●
あ	あ	う	っ	く	し	い	い

●	●	●	●	●	●	●	●
に	ほ	ん	の	は	た	は	は

○	●	○	●	○	●	○	●
し	ろ	じ	に	あ	か	く	く

譜例2 ひのまる 「おんがくのおくりもの 1」 教育出版^[15]

♪=104 6/8
 文部省唱歌 高野辰之作詞 高野貞一作曲

●	●	●	●	●	●	●	◇
1	し	ろ	じ	に	あ	か	く
2	あ	お	ぞ	ら	た	か	く

●	●	●	●	●	◇	◇
ひ	の	ま	る	そ	め	て
ひ	の	ま	る	あ	げ	て

上記2つの譜例から見られる特徴は以下の表の通りである。

表1

教科書名	「あたらしいおんがく 1」東京書籍	「おんがくのおくりもの 1」教育出版
記譜の特徴	小節は長方形で区切られておりリズムはわかるものの、音高については相対的な高低を示すのみで視覚的にやや見づらい。	実質2線譜ではあるが、上部が開放されており、読譜音域を広げる指導の際、発展性がある。ド～ラの音域を記すことができ、線と間の音符の区別もつく。こどもにとっても視覚的情報量が5線譜に比べて少なくて済み、読譜時の負担が少ない。
休符	・で示され、音符の大きさとの関連性は見られない。音価との関連性も見られず。	第2線の上に◇で示されている。四分休符の開始位置に書かれており、将来的に休符の記号が出てきたときに移行しやすい。
リズム	長方形の枠外、上部に小さく「たん」「うん」とすべてのリズムを表記している。タンバリンとカスタネットのリズム伴奏譜を別途記載している。	リズムはリズム遊びとして別の項目で扱っており、楽譜には休符の◇の下に小さく「うん」の記載があるのみ。
加線の使用	加線は使用せず。	1点ハ音を記す際加線を使用している。

一般的なピアノの教材で、よく耳にする有名な曲を初歩の学習者にも弾けるように簡単な楽譜に編曲する際、将来学習者の習熟度が上がって編曲なしの楽譜を演奏する機会を考慮し、調性や基本的なリズムは保持したまま編曲する例が見られる。これと同様に、小学校で使用する導入期の教材では、学んだことをらせん状に発展させ、その延長線上に完成形の楽譜があることが望ましい。上記の表にある上部を開放した2線譜や、リズムを別課題で扱う配慮は、音楽を「教科」として学び始めたばかりの児童に混乱を生じさせないためには大変重要なことであると考えられる。

5. おわりに

音楽教育において、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の本文中に共通するキーワードは「表現」である。幼稚園では人や物とのかかわりや遊びの中で、自然に表現能力を身につけてゆく。いっぽう小学校では幼稚園のような「生活の中で」や「総合的」といった大きなくくりではなく、「教科」としての目標が定められている。幼稚園での「遊びの中でのまねっこ」が、小学校に入ると範奏を聞いて模倣し演奏するという、より課題と目的が明確な学習へと移行するのである。

平成20年に改訂された小学校学習指導要領にある「音楽活動の基礎的な能力」の中でも「表現」するために最初に必要とされる要素とは、音楽における読み書き能力ともいえる「読譜力」であると考えられる。現在採択されている小学1年の音楽科の教科書では、この読譜力を身に付ける導入教材として、様々な工夫が施されている。今後、教育者がこれらの教材を個々の工夫によって、さらに上手に活用されることを期待したい。

引用文献

- [1] 小野貴史 (2003) 「保育園，幼稚園から小学校への関連」『音・音楽の表現力を探る』文化書房博文社 p.30.
- [2] 前掲 [1] p.29.
- [3] 関岡豊吉 (1982) 「くゆとりある」音楽教育とは』『小学校音楽教育講座 第1巻 音楽と教育』音楽之友社 pp.175-176.
- [4] 文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 p.258.
- [5] 前掲 [4] p.263.
- [6] 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p.88.
- [7] 前掲 [6] p.88.
- [8] 前掲 [6] p.88.
- [9] 前掲 [6] p.88.

- [10] 前掲 [6] p.88.
- [11] 前掲 [6] p.92.
- [12] 前掲 [6] p.92.
- [13] 中村隆夫 (2000) 「ソルフェージュを組み込んだ音楽教育再考」『音楽教育学研究 2』音楽之友社 p.195.
- [14] 湯山昭ほか 5 名 (2012) 『あたらしいおんがく 1』東京書籍 pp.32-33.
- [15] 三善晃ほか 17 名 (2013) 『おんがくのおくりもの 1』教育出版 p.38.

注

- 1) 幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうもの。
- 2) 幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならないもの。
- 3) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』では第 1 学年の共通教材として「うみ」「かたつむり」「日のまる」「ひらいたひらいた」の 4 曲を取り扱う。